

十一章 エルンスト・ユンガーの投射光線

この本において私はこれまでに、私の科学研究と職業上の活動に関連したことを主に述べてきた。しかし、その研究活動の底流には、私自身の生活やパーソナリティとの響き合いがあった。そして、とりわけ重要なのは、この研究を通して同世代の主要な人びとと多くの関わりを持つようになったことである。その中で数人の人びと——ティモシー・リアリ、ルードルフ・ゲルプケ、ゴルドン・ワッソンら——についてはこれまでに触れた。そこで以下のページで私は、自然科学者という立場を離れて、私個人にとって重要な意味を持つようになった人びととの出会いについて書き記そうと思うのである。私はそれに励まされながら、自分が発見した物質が投げかけた問題の解決を成し遂げてきたともいえるからである。

エルンスト・ユンガーとの最初の出会い

「投射光線」ということばは、エルンスト・ユンガー（訳注1）の文学やパーソナリティがどのような形で私に影響を及ぼしているかを的確に表現した語といえよう。物の表層と深層を立体鏡で見るとように把握する彼の見方によって、世界は私にとって新しい透明の輝きを持つようになったのである。これが起こったのは、LSD発見の大分以前に、幻覚剤との関わりで私がこの作家と個人的に知り合うようになる前だった。

訳注1 Ernst Jünger 一八九五～ 現代ドイツの作家。第一次世界大戦における体験を『鋼鉄の嵐』『内的体験としての戦争』等の小説で発表し、第二次世界大戦においては反ヒトラー運動に参加した。『冒険的ところ』は両大戦の間に書かれた魔術的現実主義の作品である。

ユンガーの著作である『冒険的ところ』の第一、二版を私は四〇年来、つねに手に取ってきた。これにはユンガー特有の散文の持つ美しさと魔法が余すところなく表現されている。それが描き出しているのは、花、夢、孤独な歩みであり、運命、幸福、色彩、そして私たち一人ひとりの生活に直接に関わる話題についての意見などであった。とりわけ、表層を正確に描いたり、深層を照らし出す部分では、創造の不可思議が明らかになり、それを読む各々の人間の中に、今までに経験したことのない、そしていつまでも消えることのない感動が生まれるのである。そのようにして私の目を開いてくれた詩人は、か

つて何人いたであらうか。

『冒険的ところ』では、薬物についても語られている。しかし、私にはLSDの心的作用を発見してから、特にこのテーマに興味を持ち始めるまで、ずっと長い間大した興味をひかないままにあった。

手紙を通じて、私がエルンスト・ユンガーとつながりを持つようになったのは、薬物に関連したものではなく、ただ彼の本を読んで、次のような礼状を彼の誕生日に送ったことから始まった。

ボトミンゲンにて

一九四七年三月二十九日

拝啓

長年にわたって、あなたから多くのものを受けている者として、本日のあなたの誕生日に、蜂蜜を一瓶送らせていただきたかったです。輸出申請がベルンにおいて却下されましたので、残念ながら私の気持だけしかお送りすることができません。

この手紙は、したがってミルクと蜂蜜にあふれた国からの挨拶というものではなく、むしろ、あなたの著書『大理石の崖の上』に収められた「黄金の唸り」という魅力的な文章に対する共鳴とお考え下さい。……

ここに記された著書は、第二次大戦が勃発する少し前の一九三九年に出版されたものである。『大理石

の崖の上で』は、ドイツ散文の傑作であるばかりでなく、そこには専制者の姿と、戦争や空襲の夜の恐怖がそれを予見するかのようになり、詩的な幻視の形で巧みに描かれており、きわめて意味深いものである。われわれの文通が進んでいくうちにエルンスト・ユンガーは、彼の友人を通じてすでに知っていた私のLSDの研究についても問い合わせてきた。私がそれに関する出版物を彼に送ったところ、次のような批評が返ってきた。

キルヒホルストにて

一九四八年三月三日

……あなたが発見された新しい幻覚剤についての、私の二つの構想を申し述べたいと思います。それは実際のところ、いくつかの秘密にしておかなくてはならない領域にまで踏み込んでしまったかも知れませんが……。

あなたがお送り下さったものの中には、「イギリスのアヘン中毒者の告白」という論文がありました。したが、その新しい翻訳がちょうどわが国で出版されたところですが、訳者からの手紙によると、『冒険的ところ』についての講演が刺激になったとのことでした。

私はこれまで長い間、現実の問題を考えてきたようです。その問題で、遅からずとても危険な部屋に入ることになるかも知れませんが、目にあざをつけてそこから逃げ帰ったとしても、私にはむしろ悔いのないところです。

私が今、特に興味を抱いているのは、この物質と、それが作り出す幻覚との関係についてです。私は、創造的な仕事には覚めた意識が必要で、薬の力の下ではそれが抑制されるという経験を持つたことがあるのですが、私のこの着想は反対の意味を持っていて、その薬効がなければ全く得られない洞察を得るのです。モーパーッサンがエーテルに関して記した、あのすばらしい研究もこの洞察に加えることができると思います。さらにまた人は、新しい景色、新しい群島、音楽をその中に見つけるといふ印象のとりこになっています。このことは「税関」^{注1}が出ればそれについて完全に明らかになるでしょう。これに対して、空間的な記述に関しては十全な意識が必要であると思いません。芸術家では作品に相当するものが、医者では治療にあたります。したがって彼らにとっても、私たちの感覚が織り上げている絨毯の目を通して、幾度かその領域に足を踏み入れることは大変に良いことです。さらにわれわれの時代には、幻覚剤よりも興奮剤を好む傾向があると思います。ペルヴィティンはこれに属するもので、軍隊では飛行士や他の戦闘員に配られていました。紅茶は幻覚剤で、コーヒーは興奮剤に属すると思います。ですから紅茶は、並ぶもののない芸術的地位を占めているのだと思います。コーヒーについては言えば、あれは光と影のすばらしい格子、つまり、文章を書き下している間に浮かんでくる実り多い迷いをむしろ断ち切ってしまうのです。つまり抑制を乗り越えてしまうのです。それに対して紅茶を飲むと、考えがまさに湧き出てくるのです。

注1 『冒険的ところ』(第二巻)に収められている一節の表題である「税関にて」をさしている。

私のこの「研究」については、すでに論文に書き上げてあったのですが、焼失してしまいました。

私の研究の旅はハッシンで終わりました。それを服用すると、とても気分はいいのですが、躁状態、東洋的な専制政治の状態のようになるのです。

それから間もなくして、私はエルンスト・ユンガーから手紙を受け取ったが、そこには彼が現在、執筆中の『ヘリオポリス』という小説の中で、薬物についての余論を付したことが書かれていた。そこに登場する薬物研究者について、彼は次のように書き送ってきた。

……地理学的、形而上学的な世界への旅の中で、私が描こうとしているのはその移動の手段として薬物を使うことによって、航海の向こうにある群島を探検しようとする、まさに定住型の人間についてです。私は彼の航海日誌から抜粋するという形式をとって、それを描こうとしています。もちろん私は、心の中の地球を航海するこのコロンブスに対して、よい結末を与えてやろうとは思いません。彼は結局、中毒になって終わるわけです。草々

翌年にこの本は出版されたが、それには、「ある都市の回顧」という副題が付されてあった。これは未来都市を描いたもので、そこでは、現代の技術的な道具や武器が魔術的なものにまで発達していて、無気味な技術家集団と保守勢力との間で権力闘争が繰り広げられている。また、ユンガーはその中にアントニオ・ペリという人物を登場させ、ヘリオポリスという古代都市に住んでいたこの薬物研究者を次

のように描いている。

……彼は、他の人びとが蝶を網で追いかけているのを、さらに誰かが見ている夢をみた。彼は日曜日にも祝日にも島に行かず、またパゴ海岸の酒場に立ち寄ることもなかった。もっぱら自分の小部屋に閉じ込もって、夢の世界への旅をした。絨毯の中には、いろいろな国が、また知らない島々すらも織り込まれていると彼は言った。彼にとって薬物は、この世界の部屋や洞窟へ入る鍵の役割を果たしていた。年がたつにつれて彼はたくさんの知識をそれによって得たし、自分だけの旅について航海日誌すらも付けていた。この小部屋には小さな図書館がついていて、植物の本や医学の報告書、詩人や魔術師の作品が収められていた。薬が効いてくる間、アントニオはそこでよく本を読んでいた。……そのようにして彼は頭の中の宇宙へ、発見の旅に出かけた。

アントニオ・ペリが監禁されている間に、太守の傭兵たちによってこの図書館は没収された。この図書館に収納されていた主だった本には、

……十九世紀の偉大な鼓舞者たち——ディ・クインシー、E・Th・A・ホッフマン、ポー、そしてボードレールら——のものであった。その他の書では、植物の本、中世の魔術者の著作や鬼神論にまで及んでいた。それらの著者の名前には、アルベルトウス・マグヌス、ライムンドゥス・ルル

ス、そしてネッテスヘイムの『アグリッパ』があった。……それと並んで、ヴィエールスのフォーリス版『悪魔の幻視について』と、一五八二年頃にバーゼルで公刊された、医師ヴェッケルスのとても風変りな著作集もあった。

アントニオ・ペリが他に収集していた本の中で、彼がとりわけ注目していたらしいのは、

昔の薬物学、薬局方で、雑誌や年報の中に特別なものを求めて猟に出ていたようであった。龍舌蘭の頭部からの抽出物について、ハイデルベルグの心理学者が書いた古くて分厚い本と、麦角類の幻覚剤に関するホッフマン・ボトミンゲンの研究書があった。……

『ヘリオポリス』が出版された同じ年に、私は筆者と個人的に知り合いとなったのである。

LSDへの初めての乗り込み

二年後の一九五一年二月の初め、大きな冒険をすることになった。つまり、エルンスト・ユンガーとLSDに乗り込むことになったのである。当時は、精神医学上の問題提起という関わりでのLSD実験に関する報告しかなかったもので、私はこの試みにことさら関心を持った。なぜなら、非医学的な枠内で

芸術的な人間にLSDがどのような作用を及ぼすかを観察する機会がここに与えられたからである。このときには、オルダス・ハックスリーはまだ、同じような問題提起でメスカリンに関する実験を始めてはいなかった。その実験について彼は、『知覚の扉』と『天国と地獄』という二冊の本でのちに発表することになるが……。

いざというときには医者のおかげが借りられるように、医者で薬物学者のヘリベルト・コンツェット教授が私たちの仲間に入ってくれるように私は友人に頼んだ。乗り込みは、ボトミンゲンにある私の家の居間で午前十時に行われた。エルンスト・ユンガーのように、大変感受性の強い人間には、それはとても刺激が強すぎると思われたので、最初の実験では用心のために、○・○五ミリグラムというごく少量を、三人がそれぞれ服用することにした。したがって、実験はあまり深層には及ばなかった。

初めの段階に特徴的だったのは、美的体験が強くなったことである。赤紫色の薔薇の花が、今までに感じたこともないような強い光を受けて、とてもきらびやかに光を放っていた。フルートとハーブのためのモーツァルトの協奏曲が、この世の美しさの中にあって、天国の音楽のように感じられた。お互いが驚いたことに、私たちは空想の中で日本のキセルから軽やかに立ち上ってくる煙のとばりを見つめていた。煙が濃くなり、会話がやんでから、目を閉じて安楽椅子に座っているうちに、幻想的な夢をみた。ユンガーは東洋風の絵の色の壮麗さを堪能し、私はバーバリ人が住む北アフリカの地域を旅し、さまざまな隊商や豊かなオアシスを見た。コンツェットの容貌が仏陀のように神々しく見え始め、彼自身も時間を超越しているというかすかな感じと、過去と未来からの解放、今まさにここにいるということから

くる深い喜びを体験していた。

変化した意識状態から戻るときには、とても冷たい感覚を伴った。凍えている旅人のように私たちは、上陸に備えて毛布を用意していたので、それにくるまった。馴染み深い現実に戻ると、私たちはブルドーニユのブドウ酒がふんだんに振舞われた晩餐で祝杯をあげたのである。

この旅は、私たちが互いに、この上なく幸福な体験を感じたということと特徴的であった。われわれ三人は皆、神秘的な存在体験の入口までは近づいていた。しかしその戸口は開かず終ったのである。服用量があまりに少なすぎたようであった。メスカリンを多量に服用して、もっと深い領域にまで入り込んだ経験のあるエルンスト・ユンガーは、その原因を知らなかったので、「メスカリンが虎だとすると、あなたのLSDは家猫にすぎないネ」というようなことを言った。しかし、後にLSDの服用量をもう少し多くして実験を行った結果、彼はこのような考えを改めざるを得なくなったのである。

「キセル」が出てきた上述の光景について、彼は『ゴードンホーム訪問』という小説の中で、薬物による、より深い陶酔の体験として文学的表現で、次のように描写している。

シュヴァルツェンベルクは、いつものように、空気を浄化するという理由でキセルに火をつけた。火口のふちから、青い糸のような一条の煙が立ちのぼった。モルトナーは初めは驚きの目で彼を見つめたが、やがて目に新たな力が与えられたかのように夢中になって、それを注視した。煙は細い柄から立ちのぼり、たおやかな枝についた花冠からも、香り高い煙が力強く動きながら姿を現した。

それはまるで彼の想像力が作り出したもの——砕け散る波に打たれても微動だにしないほどの深みにある淡色の海百合の織物——のようだった。この幻影の中でも時間が支配していた。時間の経過と共にそれには溝が付き、うずを巻き、輪のようになった。それはまるで、虚構の貨幣が素早く次々と積み重なっていくかのようなであった。繊維状の組織、つまり驚くほど多くの糸を紡ぎ出し、最高度に発達した神経の中に、空間の多様性が姿を現した。

そよ風が幻想に出会い、踊り子を軸のまわりに旋回させるように、それをしなやかに回した。モルトナーは驚きの叫びをあげた。おしろい花の放つ光と格子が新しい場面を作りあげた。数えきれない分子が、互いに調和をなして回析した。現象のヴェールの中では、もはや法則というものは存在しなかった。その織物はとてもうすく軽やかだったので、現象をありのままに反映することができた。すべてのものが何と単純で不可避なことか。物質からは数、尺度、重さなどが分離して現れた。物質はその覆いを脱ぎすてていた。どんな女神でも、これほど思い切って、大胆に自分を仲間打ち明けられることができたであろうか。ピラミッドだけは最も重要なものであったために、このような打ち明け方までには至らなかつた。それはピタゴラス的輝きにもとづいていた。

どのような魔力をもってしても、この輝きに触れた光景は今までに作り得なかつたであろう。

この例にみられるように、青い煙のヴェールを見るといふ、美的な領域での体験は、LSD酩酊の初期の段階、つまり意識がもっと大きく変化する前の段階に特徴的にみられる現象である。

それから何年かの間、私はヴィルフリンゲンにエルンスト・ユンガーをときどき訪ねた。彼はラーヴ
ェンスブルグから、そこへ引越していたのである。あるいはまた、スイスのバーゼル近くにあるポト
ミンゲンの私の家か、ときにビュントナーラントで会うこともあった。一緒にLSD体験をしたことで、
われわれの関係は一層親密なものとなっていた。出会って話したり、手紙の交換をしていくうちに、薬
物とそれに関連した問題が主要なテーマを作ってくれたので、あらためて再度の酩酊実験に挑戦しなく
ともよくなっていた。

われわれは薬物に関する文献を互いに交換した。そしてユンガーは、薬物関係の蔵書として、めった
に見られない貴重な論文を私に譲ってくれた。それは一八五五年にニュールンベルクで印刷された、男
爵エルンスト・フォン・ビブラ博士の著書『麻醉性の嗜好品と人間』であった。この本は薬物に関する
先駆的で標準的な文献で、とりわけ薬物史については第一級の原典ともいえるものであった。「麻醉性
の嗜好品」という名称で、フォン・ビブラが採用した薬種には、アヘンとか、チヨウセンアサガオばか
りでなく、彼が初めて薬物としてとりあげたコカ、アシタカベニ（毒きのこの一種）、ハッシンと同じ
系列の中に、今日の「麻醉剤」という概念にはとても収まらないコーヒー、タバコ、カート（訳注 アラ
ビアや東アフリカのカート樹の葉を用いる嗜好品）すらも含まれていた。

注目すべきことは、この本においてフォン・ビブラ自身が、百年以上も前に調製した薬物に対して行
った一般的考察についてであり、それは当時もさることながら、今日でも十分に利用できる実際的なも
のであるということである。それには以下のように書かれている。

……ハッシンを多量にのんで、荒れ狂いながら通りを走り回り、出会う人は誰でも自分に危害を与えようとしているのだという妄覚を持つに至る。このような中毒者は、食後にハッシンを適量にのんで数時間を気分よく、幸福感に浸りながら過ごす多くの人びとや、またコカをのんで強い緊張感に打ち勝つことができたために、それによってひどい食欲不振を免れることができたであろう人びとの数に比べたら問題にならないほどの少数である。しかし使いすぎて健康を害するまでに至ったコカ中毒者の数をはるかにしのいでいることも確かである。それは時宜を失した偽善のために、父祖ノアの慰めの杯を呪うことしかできないと同じようなものである。つまり、大酒飲みは分をおさまえることができないからである。

麻醉薬に関する実際の出来事で、しかも貴重な情報については、私はそのつどユンガーに報告した。一九五五年九月に私が彼に送った手紙はその中の一つであり、次のように書かれていた。

……私が試そうとしている新しい薬二〇〇グラムが先週初めて届きました。それはミモサ（マメ科オジギソウ属）の一種で、インディオのオリノコ族が興奮剤として使っているものです。種子を挽き、発酵させ、焼いたカタツムリの殻の粉と混ぜあわせます。インディオはこの粉末を、又状の中空になった鳥の骨で吸い込むのですが、これについてはすでにアレクサンダー・フォン・フンボルトが報告しています（『新大陸の赤道地域への旅』第八卷二十四章）。特に戦闘的なオトマコ族は、

この薬をニオポ、ユパ、ノポ、コホバなどと呼んで、現在でもきわめて多量に使っている様子です。P・J・グミールとS・J・グミールの論文（『図解——オリノコ族』一七四一年）には、次のように書かれています。「オトマコ族がカリブ族との戦いに出る前に、この粉末を吸い込むのである。なぜなら、この両部族の間には、ずっと以前から激しい戦いが行われていたからだ。……この薬を吸い込むと彼らは完全に理性を失い、荒々しく武器をつかむ。そして、もし妻たちが彼らを巧みに引きとめて堅く縛りつけておかない限り、彼らは恐るべき劫掠を毎日行うことになるだろう。それは凄まじい悪習である。……おだやかで、おとなしい他の部族——彼らもユパを吸っているが——はオトマコ族ほど激しく荒れることはない。オトマコ族の場合には、戦いの前にこの薬をのみ、自分の体を自ら傷つけて血まみれになり、非常に狂暴な状態で戦いに向かうのである。」

われわれはニオポがどのように作用するのかを知りたいと思っています。もしニオポのパーティィを行うことがあれば、必要な場合には妻たちにわれわれを堅く縛りつけてもらわねばなりませんから、あの早春の夢想の折（一九五一年二月に行ったLSDへの乗り込みのパーティィをさしている）のように、彼女らを外へ追い出すようなことは決してしないでしよう。……

この薬物を化学的に分析した結果、次のような作用物質が抽出された。それは麦角アルカロイドやシンビンと同じくインドール・アルカロイド類に属するものであり、その効能についてはすでに専門文献に記されていたので、サンド社の実験室ではそれ以上の研究を行うことは止めにしたのである。以上

に述べた幻覚作用は、嗅ぐために粉末として使用した場合のみにしか現れず、上述のインディオ部族の心的特性ともおそらく大きく関わって作用効果が発現したものと思われる。

薬物の問題点

薬物問題に関する根本的な問題について、私たちは次のような手紙のやりとりを行った。

ボトミンゲンにて

一九六一年十二月十六日

現在、私がとても関心を持っているのは、幻覚剤としての作用物質を自然科学的、化学的・薬理的に研究するのと並んで、魔法の薬としてあなたが他の薬で行ったように、私自身でも行うことができないだろうかということです。……

ところで、あなたに打ち明けないことがあります。それは、この種の薬物、つまり私たちがきわめて深く関わり合ってきたこの物質を使用することは、われわれが侵すべからざる世界を越境することになるのではないかという根源的な疑問に私は把われているということです。何らかの手段なり方法なりによって私たちが体験する世界が、現実が付随した新しい一側面である限りは、確かにそうした手段に対して何らの異議を唱える必要もないと思います。それに対して現実

を「超える」もっと広い世界を体験してしまおうと、現実はずます私たちにとって現実的となつてしまします。しかし、ここで論議に付され、とても深く関わり合っている薬物によっては、ほんのつけたし程度の窓しか私たちの感覚に開かれていないのかも知れません。あるいはまた、観察者自身によつて、自分の存在の核や自分自身の変化を体験したにすぎないのかも知れません。しかしあとでそれを問い正してみると、いつも無傷のままであつたと思われる何かに変化をこうむつたという考えに至るのです。さらに私の関心は次のような問題にも及んでいます。つまり、私たちの最も内部にある存在の核はほんとうに侵されることがないのか、そして、その物質的、物理化学的、生物学的、心的な覆いの中で進んでいるものによつて傷つけられることはないのだろうか——あるいはまた、この薬物の形を借りて物質が、人格の精神的中枢である自我を傷つけることができるような力を作り出しているのではないかということ。最後の問いは次のようなことを明らかにしてくれるでしょう。つまり、物質と精神が融合している界面で、魔法の薬の作用がおこるのであり、しかもこの魔法の物質そのものが、物質の深さ、精神との類似性を白日のもとに示す無限の物質界における断面なのです。これを、よく知られているゲーテの詩のことばを変えることで表現することができるとしよう。

もし目が太陽のようであれば、

太陽を見ることはできないように、

もし精神の素材の中に力がなければ、

素材はいかにして精神を動かせようか。

断面は、物質の変化がエネルギーの形で現れる、元素の周期律表の放射性元素にも比せられるでしょう。原子エネルギーの利用においても、この禁じられた越境の問題が提起されるのです。

この影響から、最高度の心的機能が物質の痕跡によって降服させられるという困惑を覚えるものと広い考えは、意志の自由に関連しています。

LSDやシロシビンのような、きわめて活発な向精神性の作用物質は、中枢神経系に現れその機能を調整する際に重要な役割を果たしている身体に特有の物質と、その化学的構造においてとても類似しているのです。したがって、LSDなどの服用は、正常な神経ホルモンの代りに、LSDとかシロシビンなどとの結合が生じ、物質代謝に何らかの障害がおきて、その結果、人格の特性やその人間の世界像、さらにはその行動が変化したり決定されるということが考えられます。その物質の生体内における生成や消滅については、私たちの意志によって左右されるものではなく、そこにわれわれの運命が形づくられることになるのかも知れません。このような生化学的な考え方をしていくと、ゴットフリート・ベンが『誘発された生』という随筆の中で引用している一節に到達することになるかも知れません。つまり、神は物質であり、薬物なのです！

これとは逆の立場として、われわれの生体内における物質は、たとえばアドレナリンのように、われわれの思考や感情の統覚を受けて生成され、また消去されるのであり、それが再び神経系の機能を決定するのだという考え方もあります。したがって、われわれの心的存在が化学的現象の影響

のもとで形成されると同時に、物質によってできているわれわれの生体は精神からの影響を受けながら形づくられていくともいえるのではないでしょうか。それは、雛鳥と卵とどちらが先かという問答と同じく、いずれがいずれを支配しているかを定めることはできにくい問題かも知れません。

幻覚剤を使うときに生じる根源的な危険性について、私は未だ何らの確信も持っていないのですが、それに関連して、私がいつかあなたに簡略に書き送りましたメキシコの魔法のヒルガオが持つ賦活性物質の研究を継続しております。古代アステカ人が「オロリュキュイ」と呼んだアサガオの種子の中に、化学的にはLSDときわめて類似したりゼルグ酸誘導体を作作用物質として発見しました。それはほとんど信じられないような、意外な発見でした。ずっと以前から私は、アサガオに対して特別な愛着を持っていました。それは、小さな幼稚園で私が自分で育てた最初の花だったからです。青や赤の花びらは、私の幼児期の最初の思い出として印象深く焼きついています。

その後成長した私は、鈴木大拙博士の『禅と日本文化』という著書の中で、日本の花卉愛好家の間で、また文学や造形美術の中でアサガオが大きな役割を果たしていることを知りました。アサガオの持つはかない美しさが、日本人の空想に多くの刺激を与えるようです。その中で鈴木博士は特に、千代女（一七〇二〜一七七五）の俳句を引用しています。彼女は朝、隣家に水をもらいに行かなくてはならなくなったのです。なぜなら、

あさがおに、

つるべとられて

もらい水

だったからです。このようにアサガオは、精神と肉体から成る存在である人間へ、二つの方向を持って影響していることを示しています。つまり、メキシコでは、魔法の薬としての化学的な方向へとその作用が展開していったのに対して、日本においては、その花びらの美しさによって、つまり精神的な面で影響を及ぼしていったわけです。

以上の私の手紙に対して、ユンガーは一九六一年十二月二十七日に次のような返事を送ってきた。

……それから、十二月十六日に詳細にわたるお手紙を下さったことに感謝いたします。私はそれに書かれていた主要の問題について、あれ以来ずっと考えをめぐらしていましたが、私の書いた『時間の壁のふちにて』をたまたま読み直してみても、おそらくその問題と非常に関連しているように思われました。その中で私が言わんとしたのは、物理学の領域と同じく生物学の領域でも、私たちはもはや、従来の意味での進歩を進歩として考えることはできなくなっているということです。私は、進化に深く関連しながらも、種の発達を凌駕してしまふような方法が目下開発され始めようとしているというように述べています。確かにその方法は、あたかも手袋を逆につけようとしているのかも知れませんが、しかしながら、そうすることは、ある固定化したタイプを改革しようとする新しい地球時代なのだと考えるのです。私たちの科学は、その理論や発明が進化の原因になる

ものではなく、むしろ進化した結果の一つと考えるべきだと思います。そこには動物も、植物も、地球の大気や表面もすべてが関わってくるべきなのです。私が言わんとしているのは、広がりや点を論ずべきでなく、線として論ずべきだということです。……あなたが現在お考えになっている危険性については、むしろ考慮されるに価すべきものですが、その線の全体の上に私たちの存在があることを考慮に入れるべきでしょう。その公約分母はそこにもかしこにもいずれにも見出すことができるでしょう。

放射能について述べるとき、あなたは断面ということばをお使いになったと思います。断面とはすでに発見された面であるばかりでなく、これから飛躍するための面でもあります。放射作用に比較すると、魔法の薬の作用はより純粹で、きわめて微妙なものだと思います。その作用は、古典的本性において人間的なものを超えさせるものです。グルジェフはそのことについてすでにそのいくつかを見ています。葡萄酒は多くの変化、新たな神々と新たな人間性をもたらしました。しかし葡萄酒と新しい薬物との関係は、古典物理学に対する近代物理学に比せられます。このことは小さな領域においてすら確かなことです。超越の可能性が民衆に与えられうるというハックスリーの考え方には賛成しかねます。もし私たちが物事を真剣にとらえるならば、そこで問題となるのは気やすめの虚構ではなく実体なのです。ですから鉄道や水道の敷設にあまりかかわり合う必要はないと思います。これは神学の枠からすらはみ出すことであり、占星術的な意味で新しい館に入ることを行うしても必要とするので、いわゆる神統記の章に属するのです。この比喩にあなたは当然賛成いた

だけると思ひますし、何よりもその名の付け方に注意されるべきだと思ひます。

青色のアサガオの写真をお送りくださつたことにも心から感謝いたします。それは、私が長年にわたつて庭で育てているアサガオと同種のようにみえます。アサガオが特別の力を持っているといふことは知りませんでした。しかし、おそらくどの植物にも、同じようなことがあるのでしよう。その大部分については私たちはほとんど知らないでいるわけです。その上、それは化学的現象、構造、色彩などだけでなく、あらゆる特性にはそれぞれ重要な意味があることを私たちに教えてくれるにちがひありません。

シロシビンの実験

魔法の薬に関するこのような理論上のやりとりは、実際の体験研究がいくつか加えられるようになった。その中で、LSDとシロシビンとの比較をするために、その実験が一九六二年の春に行われた。ヴイルフリンゲンにあるシュタウフェン城の以前に営林官事務所だったユンガーの家で、これについてのちょうどよい機会が与えられたのである。このきのこパーティーには、すでに本書に登場した私の友人のコンツェットとゲルプケも参加した。

古い年代記には、アステカ人たちが「テオナナカトル」を食べる前にチョコラトルを飲んだと記されている。そこで、リゼロツテ・ユンガー夫人は同じようにして、われわれに熱いチョコレート飲料を振

舞ってくれた。それから彼女は、四人の男性をそれぞれの運命にゆだねたのである。

黒ずんだ木の天井、白いタイル製暖炉、時代ものの家具の置かれたすばらしい居間にわれわれは集まった。壁には古いフランスの銅版画が掛かり、テーブルの上には美しいチュールリップの花束が置かれていた。ユンガーは、長くて幅が広く、濃い藍色の縞柄のついた、カフタンのような上着を着ていた。コンツェットは色あざやかに刺繍されたマンドリン（訳注 中国清朝の高官）服で着飾り、ゲルプケと私は家庭用のガウンを着ていた。普段でも、また旅行中でも私はあまりガウンを着ることはなかったのだが。日没のわずか前に、われわれはその薬物、つまりシロンビンを、きのこのままではなく作用物質として精製された形で二〇ミリグラムずつ服用した。その量は克蘭デラであるマリア・サビナがきのこのまま食べていたきわめて強い服用量のおよそ三分の二に相当するものであった。

一時間たっても、私には何らの効き目も認められなかった。しかし他の三人はすでに深い「酩酊状態」に入り込んでいるようであった。私は次のような希望を抱いた。すなわちきのこの酔うことで、幸せな体験として私の記憶に残っている幼年時代の出来事から何らかの映像をもう一度甦らせることに成功するのではないかという密かな期待を持ったのである。その映像というのは、初夏の風に軽やかに揺れている雛菊の野であり、夕立のあとの夕日に映える薔薇の木立ちであり、葡萄畑の塀の上にある青みがかった紫アイリスだった。しかし、ついにきのこが効き始めると、故郷の野原から生まれるこのような明るい映像に代わって、見慣れない光景が現れてきた。なかば麻痺しながら私はより深く沈んでいき、異国的でしかも死の世界のような壮厳なメキシコ風の滅びゆく町の中を歩いていた。私はその風景に一瞬

たじろぎを覚え、なるべく深く入るまいとして、目を覚まし外界や周囲に注意を集中させようとした。一時はそうすることに成功したが、次の瞬間に私は、とても力強い魔法使いのような巨人となったユンガーが部屋の中をあちこちと歩き回るのを見た。コンツェットといえは、絹の光沢の部屋着をまとい、中国のあやし気な道化師のようにみえた。また、ゲルプケも細長くなって無気味で謎めいて見えた。

より深く酩酊状態に落ちていくにつれて、すべてのものはますます異様に見えてきた。私自身も自分が何であるか定かなくなってきた。私が通り抜けてきた、あの死んだような光の中の世界は、目を閉じてみると無気味で、冷淡で、何の感覚もなく、人ひとりいかなかった。目をあけて、外界にしがみつこうとすると、私の周囲のものも無感覚で青ざめて見えた。まったくの空虚が私を今にも完全な無の世界へひきずり込もうとしていた。ゲルプケが私の椅子のそばを通り過ぎたとき、暗黒の無の中に沈んでしまわないように、私は彼の手を掴んで離さなかったのを覚えている。死ぬほどの不安が私をとらえ、生き生きした創造や現実の人間世界をとり戻したいと心から絶えず願った。やがて私はゆっくりとその世界へ戻りつつあるのを感じた。大きく澄んだ声で途切れることなく偉大な魔術師が講義をし、ショーペンハウアー、カント、ヘーゲルそして古代女神のデアについて、その老婆が語るのを見、聞いた。コンツェットとゲルプケは、私が苦勞の末ようやく再び足をつけた地上にすでにたち戻っていた。このようにきのこの世界に入ったのは、私にとって試練であり、死んだそして空虚な世界を旅するこゝとであった。実験は、私が期待したものとは違った方に進んだが、無との出会いも得るところがあった。それにまた、創造性というものについてますますその疑問を深める結果ともなったのである。

夫人が二階に用意してくれた食卓にわれわれが集まったときには、すでに夜半を過ぎていた。すばらしい食事とモーツァルトの音楽でわれわれは帰還を祝った。われわれの体験についての話し合いが明け方にまでおよんだ。

エルンスト・ユンガーは、一九七〇年にシュツットガルトのエルンスト・クレット出版社から『接近——薬物と陶醉』という本を出版したが、その中の一節である「キノコの会議」の項で、この乗り込みで彼がどのような体験をしたかについて描いている。その一部を引用して以下に掲げることにしてしよう。

いつものように、三〇分ほどの時間がまったく静寂のうちに過ぎ去った。それから最初の徴候が現れた。テーブルの上の花が烈火のように燃え始め、閃きを放っていた。祭りの前夜だった。おもての通りは週末のように掃き清められていた。往来の喧噪が苦痛を与えるように静けさの中に押し入ってきた。削ったり研いたり、ときには搔いたり叩いたり、言い争ったり、槌で打ったりする物音が、錯乱への思いがけない誘因となることもあり、また病気を予告する徴候のようないろいろな症状となって現れる場合もある。それは悪魔祓いの歴史において、たびたびその重要な演出効果ともなっていたようである。……

ついにきのこの効果が現れ始めた。春の叢林がいつそう強く光を放っていたが、それは自然な光ではなかった。林の隅では影が動いていて、それはあたたかさも何か形を探し求めているようであった。私は蒸し熱さを感じる一方で、暖炉のタイルから放射される熱気にもかかわらず全身に寒けを覚え

た。私はソファに横になり、頭に毛布をひっかけた。すべてのものが皮膚となり、手で触れられる感触を持った。網膜さえもがそうだった。そこに触れると光が生まれた。この光は色とりどりで、一列に並ぶと、あちらこちらへとゆるやかに揺れ動く、東洋風のビーズのレースになった。それは夢の中で通り抜けるような戸の形となった。喜びと危険の帳帷を、風があたかも浴衣をめくるように動かした。それはまた踊り子の飾り帯から垂れ下がったもののようにでもあり、腰が揺れるたびに開いたり閉じたりしながら、鋭敏になった感覚に向かつて、妙なる音のせせらぎが流れ寄ってくるようでもあった。かかたと手首にはめられた銀製の輪の響きは非常に大きく鳴り響いていた。それは、汗、血、タバコ、細かく刻まれた馬の毛、安い薔薇油の香りがした。既に何事がおきていようと、(キリストが誕生しようとも) われわれにとって関わりのないことのように思われた。

それはモーリタニア風の巨大な宮殿にちがいなかったが、立派だとはいえなかった。この舞踏場から隣接する部屋が地下まで続いていた。そして、いたる所にきらめき輝く帳帷——それは放射性の輝きであったが——があった。さらに、人を誘うような戯れのことば——「ぼうや、あたしと一緒に遊ばない？」——を奏でるガラスのような楽器の音が聞こえた。鳴りやんだかと思うと再び、しかもますます強烈に、執拗に聞こえてきて、こちらの状況をすべて知りつくしているかのごとくであった。

ついに形あるもの——歴史的なカラージュ絵画、人の声、カッコウの鳴き声——が現れ始めた。それは窓の外から、胸をはだけたまま立っているサンタ・ルチアの娼婦のようであったらるか？

しかし彼女を抱くための金を私は持ち合わせていなかった。サロメが踊っていた。コハクの首飾りが火花を放ち、体を揺ると乳首が急にもち上がった。ヨハネに何もしなかったというのか？——ばかばかしいことだ。そんないかがわしい不倫なことばは、私が言ったのではなく、帳帷を通り抜けて、どこからともなく忽然と聞こえてきたのだ。

干からびて、かろうじて生きている蛇が、靴ぬぐいの上をゆっくりと這い回っていた。削り磨き上げた宝石のかけらがその蛇の腹中に詰まっていた。他に多くの蛇が赤や緑の目をして天井から伺うように見下ろしていた。刈り入れのときにビルヴィスが使う小さな鎌のように、その目はきらめき囁いていた。それから大きな音がやみ、再び低く執拗に残響していた。すべてが私の意のままに自由にできるように思えてきた。「お互いに理解し合ったのだ。」

帳帷を割って、ある女性が姿を現した。そして彼女は忙しげに、私に目もくれないで、そばを通り過ぎていった。私は彼女の赤いかかとの長靴を見た。肥った太股の中半に靴下留めが結びつけられていた。その上に肉がたるみをもって覆いかぶさっていた。巨大な乳房、アマゾン河の三角州、鸚鵡、ピラニア、偽物の宝石が至るところにあった。

彼女は台所へ姿を消したようだ——それとも、ここには地下室があったのだろうか？ きらめきと囁きはすでに区別がつかなくなっていた。それは一つに塊をなしてしまったかのようにであり、私はそれを待ちかねていたのであり、小おどりをして喜んだ。

熱くて耐えられなくなり、毛布を脱ぎすてた。部屋は霞んでいたが、しかし明るかった。薬学者

は、私がついこの間ロットヴァイルの祭りで道化師を演じたときに使ったマンドリンの白い上着を着て窓際に立っていた。東洋学者はタイル製暖炉のそばに座っていた。悪霊に苦しめられているかのように彼はうめいていた。私には、皆が同じような苦しみの中におり、悪霊の出現に苦しめられているのだということが理解できた。私は、この魔女がやがて、他のものに変容するだろうと思っていた。すなわち、汚物が土となり、金のように変質することができるとだ。しかしそれが近くにある間は、そのままに甘んじていなければならぬ。

それは大地のきのこだった。穂から芽をふく黒ずんだ穀粒の中に多量の光を隠すことができるなら、メキシコの燃えるような山肌に生育するこの多肉質植物の汁にはもっと多くの光が隠されているべきだろう……

乗り込みは期待外の方向へと進んでいったようだ——私はもう一度、きのこに問いかけなければならぬ。しかしすでに、つぶやきや囁きが、きらめきや閃きがふたたび現れていた。

金属製のおびき餌が魚を自分のもとにまで引き寄せた。一度そういうモチーフが与えられると、後はまるでぜんまい玩具のように何度も同じことを繰り返していた——新たな推進力を与えて回転させると、今度は同じメロディを繰り返し始めた。その音楽は、やわらかな髪束の束にさえぎられて、遠くかなたへと流れ去ることはなかった。

私はそれが何度繰り返されたか知らないし、またそのことをくどくどと書き述べるつもりもない。多くのことはむしろ秘密にしておくほうがよいのだ。確実に夜は深まっていった。……

われわれは階上へ行った。そこには食事が用意されていた。まだ感覚は鋭く、きのこによって開き放たれた状態にあった。つまり「感覚の入口」にあったのだ。瓶に入った赤葡萄酒から光が波打ち、泡の輪が瓶の口で碎け散っていた。われわれはフルート協奏曲を聞いた。他の連中もまだあまり調子がよくないようであった。「再び人間界にいられるということは何とすばらしいことか。」アルバート・ホッフマンはそのように表現したが……。

以上のような私の体験に対して、東洋学者の場合はサマルカンドにいた。そこには腎炎のためにチムールが休息しているのだ。彼は凱旋行列に従って町々を通り抜けて、そこに到着した。そしてその朝に贈り物として出されたのは、目がいっぱい詰まった釜であった。また彼は、民衆を恐怖に陥れるため多くの髑髏を集めて建造されたピラミッドの前に長い間たたずみ、切り落とされたおびただしい数の首の中から、ようやくにして自分の首をみつけ出したのだ。それは石で覆われていたのだった。

一方、薬学者の場合には、光が現れ、その瞬間に次のようなことばを聞いたという。「あなたはなぜ首なしで椅子に座っているのか——私はそのことばを聞いたとき非常に驚いたが、今はなかその意味がわかるような気がする。私が勝手に想像していたのではないことが。」私はその話についてさらに先を続けるべきか、否かを迷っているのである。つまりそれから先は怪談じみたものとなる。

きのこの成分によって、われわれ四人は軽やかな高みではなく、より深い領域へと引きずり込まれていったのである。シロソビン酩酊は、その大部分がLSDによってひきおこされる陶酔よりも暗い色に彩られているようである。これら二種類の作用物質の効果は確かに人によっても異なる。私自身の場合も、またエルンスト・ユンガーが彼自身の実験でこれまでに報告している場合も同じように、LSD実験の方がきのこの実験よりもずっと多くの光があったようである。

再びLSD世界への乗り込み

今回、再びLSDを使って、エルンスト・ユンガーと共に、内的宇宙へ最後の突撃を試みたが、それは普段の意識状態とはまったく違ったものだった。この突撃は、最後まで残っていた入口への意味深い「接近」だった。エルンスト・ユンガーが言うように、生から彼岸までの広い領域での移行のために、この入口は初めてわれわれに開かれるだろう。

この最後の共同実験は、一九七〇年二月に再びヴィルフリンゲンの旧営林官事務所で行われた。今回は二人だけだった。ユンガーは〇・一五ミリグラム、そして私は〇・一〇ミリグラム服用した。彼は、実験中のすべてを記録し、注釈なしでそれを『接近』と題して発表するつもりであり、そのメモのための「航海日誌」を携えていた。しかしそうしたメモは結局は不十分なもので、私自身の実験で行ったのと同じように、読者には、ほんのわずかしかな物語ることができないだろうと私は思った。

実験は朝食後から、黄昏どきまで続いた。モーツァルト作曲のフルートとハープのための協奏曲——それを聞くと、平常時ならばこの上なく幸福な感覚に浸ることができるので、乗り込みの導入としてこれを鳴らすことにしていた——が流されたが、今回もそれは明らかに単なる「陶磁器製の回転盤」としか体験されなかった。陶醉は急にことばのない深みに沈んでいった。びっくりするような意識の変化を私はユンガーに書いて知らせようとしたが、二、三のことばしか思いつくことができず、さらにそれらはまやかashiで、体験を表すにはあまりに不適當な響きしか持っていなかった。それらのことばは、限りなく遠い、見慣れなくなった世界からやってくるように思え、空虚に感じられたので、私は空しく笑いながら、その努力をやめてしまったのである。ユンガーも明らかに同じような状態にあった。しかし、われわれにはことばは必要でなかった。ことばのない了解をするには、まなざしで十分であった。しかし私はなるべく努力して、いくつかの切れ切れの文を紙に残すことができた。酩酊状態が始まった頃に、「われわれのボートは激しく揺れている」と書いている。あとになって、華やかに製本された蔵書に目をやったときには、「赤い金が中から外へ迫ってくるようだ——金の輝きがにじみ出てくる。」と記している。外では雪が降り始めていた。仮面をかぶった子どもや、トラクターに牽引された謝肉祭の山車が通りを過ぎていった。雪の積もった庭へ、窓越しに目をやると、高い囲い塀の向こうに色とりどりの仮面が見えた。それは限りなく幸福をもたらしてくれるような青い色調に染まっていた。「ブリュッセル風の庭——対象と（共に）、対象の（中で）生きる。」それから後に、「このひととき——それは体験されている世界と何らの関わりもない瞬間。」と記している。そして終りに近くなった頃、私は快い洞察

に達したようだ。「今回は、私のやり方で確かめることができた。」このLSD実験では、すばらしい接近がなし遂げられたのである。